

『太平記』の「会稽の戦」論

——漢籍との比較を通して——

徐 萍

一、はじめに

『太平記』巻四に次のような場面がある。児島高德が、隠岐国に流される途中の後醍醐天皇の救出に失敗して、桜木の幹に「天、勾踐ヲ空シクスルコト莫レ、時ニ范蠡無キニシモ非ズ（天莫^レ空^ニ勾踐、時非^レ無^ニ范蠡。）」と刻む。その詩は、訳もわからぬ警護の武士に読み上げられたため、後醍醐天皇の耳に入った。天皇は自分のためにお事をする忠臣・義士のあることを知り、頼もしく思った、というシーンである。そこから、児島高德の詩の説明として、長々と呉越合戦の経緯を叙述する。

「呉越戦の事」は中国春秋時代の末、東南の片隅にあった两国（呉・越）の戦いを描くものである。登場人物には

尋常ならざる忍耐力をもち、復讐一筋で二十数年も生きる勾踐や、君主のために最善を尽くし、その恩賞を受けずに隠居した范蠡、死後も国の滅亡を生身で見届けたいので、眼を抜き出し、城門に懸けてほしいと願う伍子胥などがおり、合戦譚の中でも個性豊かなものだといえよう。それは大きく、「会稽の戦」、「囚人勾踐」と「復讐の物語」との三つに分けられる。越王勾踐の立場から見れば、それぞれ、会稽で恥辱を受ける、囚人として呉に仕える、会稽の恥を雪ぐ、の部分に当たる。本稿の論じる対象は、第一部分の「会稽の戦」である。

『太平記』の呉越合戦に関しては、いくつかの先行研究が見られる。⁽¹⁾ 本稿は、それらを踏まえながら、本説話の源泉にあたる『史記』や『呉越春秋』などの漢籍との比較を

通し、『太平記』の描いた「会稽の戦」の、原典との距離を明らかにしたうえで、そのきつかけを日本における「会稽の恥」（「会稽の戦」）の受容史から探り、『太平記』の独自性を究明するものである。

なお、本稿に引用する『太平記』の本文は玄玖本⁽²⁾に基づいて翻刻し、私意によって読みや送り仮名を付したものである。『太平記』巻四の本文交渉を精査した小秋元段氏の研究⁽³⁾を参照しながら、最古態を示すB系統（梵舜本など）、B系統を元に独自の増補改訂を施したC系統（天正本など）、C系統以後に成立したと思われるD系統（西源院本など）をも視野に入れて論を進めていく。

二、会稽の戦

本稿でいう「会稽の戦」は、呉軍に囲まれて屈辱的な講和を結んだ地名にちなんだ呼称である。その合戦では、会稽山に移る前に、呉越両軍はまず夫椒で戦っていたのである。

『太平記』巻四の呉越説話では、夫椒での戦を以下のよう

に描く。

越王十一年二月上旬二、勾踐自ラ十余万騎ノ兵ヲ率シ
テ呉国エゾ被^レ寄ケル。呉王夫差、是ヲ聞テ、「小敵ヲ

バ^{イッ}勝ルベカラズ」トテ、自ラ二十万騎ノ勢ヲ呉ト越トノ境ナル夫椒県ト云所ニ馳セ向ヒ、①後ニ会稽山ヲ当テ、前ニ曠河ヲ隔テ、陣ヲ取ル。②態ト敵ヲ討ンガ為ニ、三万余騎ヲ出テ、十七万騎ヲバ、陣ノ後ノ山陰ニ深ク隠テゾ置タリケル。猿程ニ越王夫椒県ノ陣ニ打ち莅^イデ、呉ノ兵ヲ見給ヘバ、其勢、纔ニ二、三万騎ニハ不^レ過ト覺ヘテ、所々ニ控エタリ。越王是ヲ見テ、思フニハ似ズ小勢ナリケリト蔑テ、十万騎ノ兵ノ同時ニ馬ヲ打ち入レテ、馬筏ヲ組テ打ち渡ス。比ハ二月上旬ノ事ナレバ、余寒猶烈クシテ、河水氷ニ列テケレバ、兵ノ手凍テ弓ヲ控ニ協ハズ。馬ハ雪ニ泥ンデ懸挽モ自在ナラズ。サレドモ越王賁鼓ヲ打テ被^レ進ケル間、越ノ兵ノ我々先ント轡ヲ並テ懸入ル。呉国ノ兵ハ兼テヨリ敵ヲ難所ニ帯入テ執リ籠テ打ント擬タル事ナレバ、③態ト一軍モセデ夫椒県ノ陣ヲ引退テ、会稽山エ引籠ル。越ノ兵勝ニ乗テ、北ヲ追フ事三十余里。（中略）。呉ノ兵二十万騎、思フ図ニ敵ヲ難所エ帯キ入テ、四方ノ山ヨリ打ち出テ、越王勾踐ヲ中ニ取り籠リ、一人モ不^レ漏ト責メ戦フ。④越兵ハ今朝ノ軍ニ遠懸シテ馬人共ニ疲タル上、無勢ナリケレバ、呉ノ大勢ニ囲レテ一所ニ打ち寄テ引エタリ。進テ前ナル敵ニ懸ラントスレ

バ、敵ハ險阻ニ支テ鏖ヲ調テ待チ懸タリ。引キ返シテ後ナル敵ヲ払ハントスレバ、敵ハ大勢ニテ、越兵ハ疲タリ。進退此ニ谷^{キハマツ}テ、敗亡已ニ極レリ。(中略)越王、遂ニ打チ負ケテ、七万騎討レニケル。勾踐、怵兼テ、会稽山ニ打チ上リ、越ノ兵ヲ数ルニ、打チ残サレタル兵ハ纔ニ三万余騎ナリ。

勾踐の来襲を聞いた呉王夫差は、自ら二十万騎の軍隊を引率して、策略をめぐらしつつ、傍線部①のように布陣した。つまり、三万余騎の呉軍は曠河を前に、会稽山を後ろに陣取って越軍を待ったのである。

春秋時代の呉の国は現在の中国江蘇省中南部にあり、越の国は現在の浙江省の中北部に位置する。つまり、呉が北、越が南である。したがって、呉軍が越との境界にある夫椒に進軍することは、北から南方に向かうことになる。「後ニ会稽山ヲ当テ、前ニ曠河ヲ隔テ」というのは、曠河が南で会稽山がやや北にあり、両者の間に戦場というるスペースがあると予想できる。また、傍線部②は、呉王夫差が、越王の兵を騙すために、最初に三万余騎を出兵し、残りの精兵十七万騎を会稽山の山陰に隠した作戦である。勾踐は曠河を隔てて呉軍の三万騎を小勢とあなどり、余寒の未だ厳しい二月の曠河を渡り、呉軍(三万騎)と戦った。呉軍

は一戦もせず(失敗した様子を装い)、北にある会稽山へと退散し、越軍を会稽山手前の難所に引きこむ(傍線部③)。勾踐は勝利の勢いに乗って、呉軍を「三十余里」^④追いかけて、人馬ともども疲労を極めたところ、いきなり呉軍の十七万騎に包囲された。前に進めば敵あり、後ろを突破しようと思えば会稽山の陰に大勢の呉軍があり、勾踐はやむをえず残兵を率いて会稽山に登った(傍線部④)。それが『太平記』に描かれる「会稽の戦」である。『太平記』の叙述に基づき、当時の戦場を図1で再現すると、次のようになる。



【注】囲まれた範囲は呉越の境である夫椒県を指す。

しかし、そこにはいくつかの疑問がある。第一に、会稽山は夫椒ではなく、その南に外れる。会稽山は越国（現在の浙江省紹興市）にあり、夫椒は呉越の境（現在の浙江省嘉興市）にあり、会稽山のはるか北に位置する。第二に、曠河の問題である。史実や実際の地理などを調べて改変を行うとされる天正本『太平記』では、「曠河」が「長江」となっている。しかし、長江は、呉の国（現在の江蘇省）を貫く川であり（図2を参考）、会稽山は長江の北どころか、はる

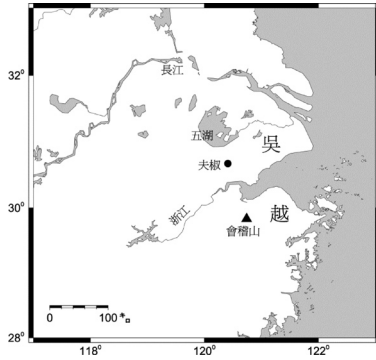


図2

【注】『国語』の「関係地図」や、『中国地図集』（中国地図出版社、一九九四年八月）を参考にし、Generic Mapping Tools (<http://gmt.soest.hawaii.edu/>) を用いて作成した。

か南のほうに位置しているので、呉の布陣に現れることはまずありえない。また、長江は全長六三〇〇キロで、中国第一の大河である。南京までは一万トンの船舶が航行できる。仮に「曠河」を「長江」としても、とても人馬の簡単に渡れる河ではない。

当該説話の源泉となる『史記』「越王勾践世家」では、

（勾践）遂興^レ師。呉王聞^レ之、悉発^二精兵^一擊^レ越、敗^二之夫椒^一。越王乃以^二余兵五千人^一保^二棲於会稽^一。呉王追而围^レ之。^⑧

と簡単に述べただけである。「曠河」も現れないし、まして会稽山との位置関係や呉の布陣などに、一向に言及しない。しかし、夫椒の戦場で敗戦を喫した勾践が会稽山に逃げ籠ったとき、（北にいた）呉軍が（南に）追いかけて、会稽山を囲んだという記述から、夫椒は会稽山と場所を異にし、会稽山の北にあることが推測できる。

一方、呉越の故事を広く流布せしめた『呉越春秋』の現存本文では、当該合戦について記録していないため、確認することができない。しかし、『国語』「越語」下では、

越王勾践即位三年、而欲^レ伐^レ呉。范蠡進諫曰、（中略）。王曰、吾已断^レ之矣。果興^レ師而伐^レ呉、戰^二於五湖^一、不^レ勝、棲^二於会稽^一。

と書き記し、また『春秋左氏伝』⁽¹⁰⁾ 哀公元年では、

呉王夫差敗^レ越于夫椒。報^二檣李^一也。遂入^レ越。越子以^二甲楯五千^一保^二于会稽^一、使^下大夫種因^二呉大宰嚭^一以行^上成。

とある。

「五湖」とは「太湖」のことであり、会稽山のはるか北にある意味では、「夫椒」と大差がないと考えられる。したがって、『国語』も『春秋左氏伝』も『史記』同様に、勾踐が一旦破れて南にある越の会稽山に立て籠もったとなる。さらに、時代ははるかに下るが、呉越合戦の始末を史実に基づいて描く演義類が後代に存する。そのうちの一本『西施演義』第三章では、

（勾踐）不^レ聴^二二人之言^一、悉起^二國中丁壯^一、共三万人、迎^二敵於椒山之下^一。初次交戦、呉兵稍却、殺^二傷百余人^一。勾踐乗^レ勝直進、約行^二数里^一、恰遇^二夫差大軍^一。^{（南カマヤ）}兩^下、布陣大戰。（越軍の敗北の記述を省略）勾踐奔至^二固城^一、藉以自保。呉兵困^レ之數重、絶^二其汲道^一。（中略）勾踐見^二呉兵不^レ退去^一、遂命^二范蠡率^レ兵堅守^一、自己帶^二領敗殘人馬^一乘^レ間奔至^二会稽山^一。点^二閭甲楯之數^一、只剩得^二五千余人^一。

とある。波線部「椒山」とは「夫椒」のことである。⁽¹²⁾ 勾踐

は敗戦して呉軍を突破して会稽山に逃げ帰ったのである。したがって、『太平記』に見られる戦場の地理関係の描写は、中国の伝承を離れた独自の要素をもつものだと見てよい。

三、曠河とは

ここでは、二つのことを考えなければならない。第一に、なぜ『太平記』の「会稽の戦」記事に「曠河」が登場するのか。第二に、「会稽山」を史実とかけ離れて描写することのきっかけは何であろうか。

現存本『呉越春秋』⁽¹⁴⁾ 卷第七「勾踐入臣外伝」は、人質として呉に入る勾踐らを越の群臣が見送るさまを描写している。その冒頭に

越王勾踐五年、五月、与^二大夫種范蠡^一、入^二臣於呉^一、群臣皆送至^二浙江之上^一、臨^レ水祖^レ道、軍陣^二固陵^一。の文がある。傍線を付した「浙江」は川の名前であり、波線部「固陵」に対する同書の注釈は、『水経注』を引用して、浙江又経^二固陵城北^一、昔范蠡築^二城於浙江之濱^一、言可^二以固守^一、謂^二之固陵^一。

と書き記した。つまり、「浙江」という川が、越国の城（都の中心）の北側に位置する。越王が呉に行くときは、この川を渡った。また、勾踐が、文種から祝詞を受けて、群臣

と唱和したあと、

遂登^レ船径去、終不^二返顧^一。越王夫人乃^レ抱^レ船哭。

とあり、勾踐が夫人とともに船に乗って呉に人質として行ったことが伝わる。

一方、呉越の間に起こった夥しい合戦を書き記す『国語』
「呉語」では、次のような記述が見られる。

於^レ是呉王起^レ師、軍^二於江北^一、越王軍^二於江南^一。越王乃中^二三分其師^一、以^レ為^二左右軍^一、(中略)。夜中、乃命^二左軍右軍^一、涉^レ江鳴^レ鼓、中水以須。(以下略)

『国語』の右の記述は、会稽の恥を雪ぐ戦を描くものであり、そこに勝った越軍はついに呉を滅ぼしたのである。その戦は、呉越両軍が松江を隔てて南北に対峙することから始まる。越軍が夜中に川を渡ったのは決勝の要となっている(傍線部)。

右に挙げた、呉越合戦にまつわるいずれかの川の記述が、『太平記』に登場する「曠河」の原型ではなからうか。それが「天正本」になると、有名な長江だと誤解した可能性が高い。

一方、「会稽山」の位置関係に見られる誤差は何ゆえであらう。それを考えるために、「会稽」、「会稽の恥」の伝承過程を考察しなければならない。

四、「会稽」

そもそも、会稽という地名が日本に伝わったのは早い。八世紀半ばに成立したとされる『家伝』⁽¹⁵⁾上巻では、貞慧の聰明好学をみて、大臣の鎌足が「雖^レ有^二堅鉄^一而非^二鍛冶^一、何得^二干将之利^一。雖^レ有^二勁箭^一而非^二羽括^一、詎成^二会稽之美^一」と思った。「干将」とは名剣の名である。堅き鉄を鍛冶したからこそ名剣になることと対になって、強い箭も羽と筈をつけた(矢を作る)からこそ、会稽山に産する竹で作った優れた矢という美名を成したのでと、人の優れた才能や知識などを喩えていうのである。会稽の竹で優れた矢を作る話は、『淮南子』「墜形訓」に見られる。⁽¹⁶⁾

また『扶桑集』⁽¹⁷⁾でも、大江朝綱が渤海使の詩に唱和した一首に、会稽山がその秀麗な風景を以て登場する。

渤海裴大使到^二越州^一後、見^レ寄^二長句^一、欣感之至、押^レ以^二本韻^一

王道如今喜^二一平^一 教^二君再入^二鳳凰城^一
朝^レ天婦^レ洛秋雲遠 望^レ闕高^レ詞夜月明

江郡浪晴沈^二藻思^一 会稽山好称^二風情^一
恩波化作^二滄溟水^一 莫^レ怕^二孤帆万里雄^一

「越州」に日本の越州と中国の越の国をかけて詠まれた一

首であるが、頸聯の下句で詠まれたように、会稽は風景明媚なところとして知られていた。そのような「会稽」の一面は、日本に伝来し、かつよく読まれた『世説新語』「言語第二」にも見られる。

顧長康從_レ会稽_一還。人間山川之美_一。顧云、千巖競秀、万壑爭_レ流。草木蒙_二籠其上_一、如_二雲興霞蔚_一。

顧長康とは顧愷之ともいい、東晋時代の画家である。会稽を漫遊した後「千巖、秀を競ひ、万壑、流を争ふ」と言い、その上に草木の繁茂するさまは雲霞の湧き起こるようだと形容する。そのような環境であるからこそ、当時多くの文人たちが暗い政治から脱出して隠居することもできたのであろう。竹林の七賢もさることながら、『世説新語』はまた王羲之父子の話もたくさん書き記し、当時の会稽が文化的な盛況を迎えていたことを物語る。日本でも有名な逸話、「任誕第二十三」ノ四十六、四十七を挙げてみよう。四十六話は王羲之の子の王徽之が竹を君に喻えて呼ぶ説話であり、その次も同じ王徽之の文士としての風流譚である。

王子猷居_二山陰_一時、夜大雪。眠覺、開_レ室、命酌_レ酒、四望皎然。因起彷徨、詠_二左思招隱詩_一、忽憶_二戴安道_一。時戴在_レ剡。即便夜乘_二小船_一就_レ之、經宿方至。造_レ門不_レ前而返。人間_二其故_一、王曰、吾本載_レ興而行、興

尽而返、何必見_レ戴。

雪の夜に、突然友人のことを思い出し、夜もすがら船に乗っていったが、明け方になり、その門まで至って会わずに帰ったという話である。人が怪しく思っ、そのわけを聞くと、「訪ねていくのは興に乗った故であり、会わずに帰ってくるのも興が尽きたことによるので、何も可笑しいことではない」と答えた。この話に出る二つの地名「山陰」は会稽山に近いところであり、「剡県」も会稽地域にあたる。「会稽」の地名は現れないが、そのあたりで起きたことは確かである。東晋から劉宋初期にかけて、会稽山を中心とする会稽地域は、知識人の隠居や交流の場所であったことがすでに明らかにされている。

また『枕草子』や『和漢朗詠集』にも見られる、「蕭会稽之過_二古廟_一、託締_二異代之交_一」（大江朝綱）では、会稽の丞となった蕭允を「蕭会稽」と詠んでいるので、地名の「会稽」でそれに関わる人物を表すことがわかる。

以上、見てきたように、「会稽」は「会稽山」をもつ地域の地名として使われた。矢の名産地や隠居地として知られるところである。さらに地名に関わる人物を「某会稽」と称したりすることもある。しかし、管見の限りでは、これらの意味で日本で用いられた用例は多くない。それに、『世

説新語』のような作品においても、故事に登場する人物は印象鮮やかであるが、「山陰」や「会稽」などの地名には特に関心が払われなかったと推測できる。地名や特産などを意味する「会稽」はありながらも量的には少なく、深く浸透していないと見てよい。日本文化に吸収されたのは、次節で述べる「会稽の恥」にまつわる「会稽」である。

五、「会稽の恥」

上述した伝承と平行して受け継がれたもう一つの「会稽」のイメージは「会稽の恥」である。そもそも、呉越合戦という故事は早く伝わったが、平安時代末期まではあまり引用された例を見ない。しかし、鎌倉前期になると、「会稽の恥」などの用例が増えたようである。

軍記物語の祖とされる『将門記』では、敗戦の屈辱を味わった良正が、将門に復讐したいという思いを、

会稽の深きに依りて、尚し敵対の心を起こす。⁽²⁶⁾

と表現する。ここでいう「会稽の深き」は、「会稽での恥の深き」意だと読み取れる。また、良兼が将門に仕返しをする理由も、

本意も怨みを忘れずして、尚し会稽の心を遂げむと欲ふ。⁽²⁶⁾

と記す。ここでいう「会稽の心」とは明らかに「会稽の恥を雪ぐ心」を指す。その他、「将門が会稽未だ遂げず」の例⁽²⁷⁾も見られる。それらの「会稽」の用例は、漢籍での呉越合戦の故事を踏まえた上での省略表現だったことは間違いない⁽²⁸⁾。

『平家物語』にも「会稽の恥」は多出する。覚一本⁽²⁹⁾を例に取る。例えば、巻一では二条天皇が崩御した際に寺々による額打の争いが語られる。もともと興福寺の後に打つべき延暦寺が、先に打ってしまったため、興福寺の荒法師たちは延暦寺の額を切り落とし、打ち割ってしまった。その後、延暦寺の大衆らは、興福寺の末寺である清水寺をことごとく焼き払った。その理由は、

是はさんぬる御葬送の夜の会稽の恥を雪めむが為とぞきこえし。

と、復讐にあることを明かした。同じく『平家物語』巻八「水嶋合戦」では、平家と義仲の率いる源氏勢とが水嶋で合戦する様子が描かれる。その末尾はこう書かれている。

平家は水嶋のいくさに勝てこそ、会稽の恥をば雪めけれ。

平家にとって、水嶋での勝利は、これまでの敗戦の恥を雪ぐものであると評価された。

一方、史料類ではどうなっているのかを確認してみたい。

『吾妻鏡』⁽³⁰⁾ 治承四年（一一八〇）八月二十四日条で、

実平重申云。今別離者。後大幸也。公私全^レ命。廻^二計於外^一者。蓋^レ雪^二会稽之恥^一哉云云。

とある。実平を代表とする源氏勢が、先日、大庭三郎景親を代表とする平家軍に敗れた。その背景を踏まえ、今回の離別は、その石橋山で敗戦した恥を雪ぎたいために命を全うするものであると述べた。したがって、ここでの「会稽の恥」は文字通り、「石橋山での敗戦の恥」を意味する。

右の記事と同日に、三浦と畠山の両族も由井浦で合戦をした。その二日後の記事はこう書かれている。

廿六日丙午。武藏国畠山次郎重忠。且為^レ報^二平氏重恩^一。且為^レ雪^二由比浦会稽^一。欲^レ襲^二三浦之輩^一。

三浦の輩を襲撃する理由の一つは「由比浦の会稽を雪ぎたい」からである。ここでの「会稽」はすなわち「会稽の恥」であり、「由比浦で破れた屈辱」の意味である。⁽³¹⁾「会稽」がもともと地名であるにもかかわらず、「由比浦会稽」と書き記すことによって、「会稽」は「敗戦」のごとき意味で用いられたことがわかる。

そのほか、義経が父兄の敵討ちをしたい思いを「会稽の思」と語る記録もあり、曾我五郎が工藤祐経を殺す敵討ち

も「会稽之存念」と表現する⁽³³⁾。それらの場合における「会稽」は、「会稽の恥を雪ぐ」ことに当たり、「復讐」の意味で使われている。

また、『百鍊抄』⁽³⁴⁾ 嘉応二年（一一七〇）十月二十一日条には、摂政参内間、於^二路頭^一勇士有^二狼藉事^一。切^二前驅等本鳥^一。是先日資盛之^二会稽也^一。

と記した。摂政基房の先駆などの髻が切られる事件は、『平家物語』の「殿下乗合」で物語化されて有名である。『平家物語』によれば、「資盛の会稽」とは、資盛が郎党と共に鷹狩りの帰途、殿下の行列に会い、下馬して路を譲るべき礼儀を取らなかったため、殿下側に無理やり馬から引きずり下ろされるという恥を受けたことである。一方、殿下基房の先駆たちの髻を切ったのは、資盛が辱められたことを聞き、祖父である清盛が郎党たちに命じた復讐の行為である（史実は父親の重盛の仕業であるが）⁽³⁵⁾。したがって、これも資盛の受けた屈辱の報復の意である。

右と似た用例は、また四十八卷本『法然上人行状絵図』⁽³⁶⁾にも見られる。その巻一に、法然の父親である時国は、定明に夜うちされて死ぬのだが、その直前に法然に次の遺言を残した。

「汝さらに会稽の恥をおもひ、敵人をうらむる事なか

れ、これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれ、いゑを出で、我菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求には」といひて、(以下略)。

線を付した「会稽の恥」とは、父親が敵に夜討され、辱めを受けたことと思われる。「会稽の恥」はもともと敗戦を喫して辱めを受けるという意味であるが、ここでは「私的な殺害による怨念」の意に変換されている。そしてこのことは「会稽の恥」という文辞が、四十八卷本法然伝の成立する一三一二年前後⁽³⁷⁾において、広く知られていたことを物語る。

以上、文学と史料類を中心に「会稽」の用例を検討してきた。鎌倉期前後において、「会稽」という文辞が、合戦や武力衝突に用いられることが多く、しかも、失意の側の文言として多用されたことも明らかである。また、「会稽」は会稽山ゆかりの中国東南の地名という本来の意味がなくなり、「失敗して会稽山に逃げ籠もり、屈辱的な講和を結ぶ」という意の「会稽の恥」を媒介として、「敗戦」や「恥辱」などの意味で使われる。そのため、「会稽」の前には、失意の側の人名や、場所を表す地名などを置くことができる。つまり、「会稽」は「会稽の恥」を意味し、さらに「恥」を

意味するようになった。その「恥」の理由は場合によって、敗戦だったり、父兄や子孫が辱められたことだったりする。「会稽」の語は多様な文脈で用いられるようになった。

ところで、そうしたなか、「会稽の戦」そのものを語る記述も現れた。それらに登場する「会稽」はバラエティに富むものだと言わねばならない。

『平家物語』の一異本とされ、諸本の中で最も詳細な呉越合戦の記事をもつ『源平盛衰記』⁽³⁸⁾(以下盛衰記と略称する)では、「会稽の戦」を、

会稽ノ恥ヲ雪トハ、異朝ニ稽ノ山ノ洞ト云所アリ。蚕山トモ名、会稽山トモ申也。呉越ノ境ニ在レ之トカ。画国境ヲ論ジテ代々ニ軍絶ズ。

と描写している。傍線部で示したとおり、『盛衰記』は会稽山が呉越の境界にあると捉えており、呉越画国の間に起こる度重なる合戦を、会稽山という国境をめぐる争いだと理解している。同類な伝承の要素を備えるものには、例えば国会図書館本『和漢朗詠注』、

越王ノ勾践と呉王ノ夫差と、会稽山ノヤマ⁽⁴⁰⁾論ジテ合戦ス。

とあり、『盛衰記』に近い伝承の流れを汲んでいると思われる

る。

一方、右の理解とはやや異なり、「会稽山」が「会稽の戦の戦場」であるとの認識を示す作品もいくつかある。

例えば、金刀比羅本『平治物語』⁽⁴¹⁾は、

越王勾践と呉王夫差と会稽山を中にへだて合戦をしけるに、越王軍にうちまけて、敵呉王夫差に囚人となつて、(以下略)。

と述べ、会稽山を隔てて戦ったものだとする。また、陽明本『平治物語』⁽⁴²⁾には、

越王勾践と呉王夫差と、会稽山を中に隔てて合戦をしけるに、越王、戦に打ち負けて、敵呉王夫差に捕らはる。

と、近い叙述がみられる。似たような説明は『和漢朗詠集永済注』⁽⁴³⁾(以下永済注と略称する)にも見られる。

勾践ハ、呉王夫差トテ、呉ノクニノ王ナリシ人ト、カタキニテナムアリケル。呉王ハ、セイモオホク、威モマサリタリケレバ、会稽山トイフヤマニテ、タ、カヒケルニ、越ノイクサヤブレテ、勾践、イケドリニ、セラレニケリ。

傍線で示すとおり、『永済注』は明らかに会稽山を戦場だと理解したのである。九条家本『平治物語』⁽⁴⁴⁾が、

会稽山といふ所にて、呉をほろぼす故に、会稽の恥を雪といふ事あり。

と記述するごとく、「会稽山」を復讐の戦場だとする説も見られる。さらに、『和漢朗詠集私注』⁽⁴⁵⁾(以下私注と略称する)の「強呉滅兮有^二荊棘^一、姑蘇台之露濃濃」の項目では『史記』を出典として明記しながら「会稽の戦」を、

遂呉与^レ越戦^二于会稽山下^一。越軍大敗。勾践隠^二於会稽山^一。

と語り、呉越の合戦が直接会稽山のふもとで行われたとする。

たしかに、史実を棚上げすれば、会稽山で負けて捕われたり、会稽山のふもとで合戦をし、破れて会稽山に逃げ込んだりとする説がいかにも合理的なものである。しかし、『私注』のように、『史記』を引用しながらも、その記述に差異が見られることに注意すべきであろう。無論、注釈者が直接『史記』の原典に当たらず、孫引きしているうちに異なる理解を培った可能性が高い。しかし、大切なのは、異なる理解を可能にしたこと自体である。日本における「会稽の恥」の受容史があるからこそ、右のような理解が可能になったのである。

それらの「会稽山」の捉え方が史実からかけ離れたもの

であることはいうまでもない。「会稽の恥」——「会稽の戦」——「会稽」——「会稽山」というような連続したイメージが混淆しているなか、「会稽の恥」がすなわち「会稽山を論じる合戦」であるという認識が出来たのではないか。そのよう認識を培った土壌には、前述した「会稽の恥」の受容史もあるだろう。また、史料類で見受けられる「会稽」の活用方法も、そのような混淆の傾向を物語る。その傾向を極めれば、「会稽の戦」はすなわち「会稽山」を争う戦であり、「会稽山」はすなわち呉越の国境にあるものだということになる。『平治物語』や『平家物語』も、おそらく夫椒の戦場をわざと隠蔽したのではなく、「会稽の恥」（「会稽の恥を雪ぐ」ということを中心に説明しているうちに、自然に「会稽山をめぐる戦」だと観念したのであろう。そのような「会稽」に関する受容史のあるなか、『太平記』は「会稽の戦」を詳細に描写しようとするとき、「会稽」と「夫椒」の地理関係をごちゃ混ぜにしたのではないか。

六、結びにかえて——『太平記』における「会稽の戦」

ところで、『太平記』は単に「会稽の戦」の戦場をめぐる地理関係を間違ったのだろうか。そうは思えないのである。一言でいえば、『太平記』にみられる「会稽の戦」は、漢籍

に見られるそれよりも合戦に相応しい。会稽山の実地の地理を無視すれば、『太平記』の叙述はとてもわかりやすく、戦略性に満ちた合理的なものである。

「会稽の戦」の当時において、『太平記』の呉王たちは、「後二会稽山ヲ当テ、前二曠河ヲ隔テ」三万騎を餌にして、勾踐の攻撃を誘った。勾踐は敵軍を見渡してその軍勢を判断してから、春寒の大河を渡る。結果的には夫差の策謀に陥れられるのであるが、それなりの戦況判断はあったのである。早春の寒い河を渡ったことで体力などを消耗し、さらに、退散する敵軍を三十里ほど追いかけて、軍勢は疲れ切る。そのため、会稽山の陰で待機していた呉軍から攻撃を受け、一気に敗れてしまい、会稽山に逃げ込む。『太平記』の「会稽の戦」は細かいところまですべて合理的に構成されている。もちろん、原典と異なった部分は『太平記』独自の創作だと断言はできない。あくまでも、『太平記』というテキストから読み取れるということである。

確かに勾踐をはじめとする越軍は、「会稽の戦」で失敗した。戦場において、呉軍の策略に陥ったのも事実である。それは勾踐が呉にはまるほど愚かだったと思われるかもしれない。しかし、勝敗は相対的なものであり、より強いものが勝つのは世の常である。したがって、双方の指揮者を

評価するときには、相手の力量を視野に入れる必要がある。呉軍の策略がすばらしいと強調すればするほど、勾踐の愚かさは少なくなるはずである。換言すれば、勾踐の負け戦を好意的に描写しようとするれば、双方ともすばらしいが、呉軍は奇策をかけたので勝ったとする手がある。なにしろ、敵側が強ければ強いほど、負けた方の咎めが減るわけである。『太平記』の「会稽の戦」の描写はまさにそのようなものである。それは、勾踐を後醍醐天皇に喩えていることにもよると思われる。『太平記』における後醍醐天皇の批判はたしかにある。しかし、すくなくとも「呉越合戦」においては後醍醐天皇を好意的に描写していると思われる。本説話の冒頭の詩歌もそれを物語る。

したがって、『太平記』の描いた「会稽の戦」は、原典となる漢籍とかけ離れるところは大きいがあるが、それはただの誤伝とすべきものではなく、「会稽」や「会稽の戦」の日本の受容史の流れを汲み、かつ『太平記』の世界に相応しい形になったものといえる。

【注】

(1)

例えば、釜田喜三郎氏「民族文芸としての太平記の一断面——児島高德論をめぐって——」（『国語と国文学』第二十六巻二号、一九四九年二月）。『太平記研究——民族文芸の論——』（新典社、一九九二年十月）再録。川口久雄氏「伍子胥変文と我が国説話文学」（『国語』第五卷一・二号、一九五七年四月）。増田欣氏「太平記における呉越説話」（『中等教育研究紀要』第六集、一九六〇年六月）。『太平記』の比較文学的研究（角川書店、一九七六年三月）再録。北村昌幸氏『梅松論』における「異朝」——『太平記』との比較を通じて——（『日本文芸研究』第五九巻第二号、二〇〇七年九月）。『太平記世界の形象』（塙書房、二〇一〇年十一月）再録。森田貴之氏「天正本『太平記』増補方法小考——巻四「呉越戦の事」増補漢詩について——」（『京都大学国文学論叢』二十二号、二〇〇九年九月）。

(2)

『玄玖本太平記』の底本は前田育徳会尊経閣文庫所蔵本を影印にしたものである（勉誠社、一九七三年十一月）。詳細は鈴木登美恵氏による同書の解題を参照。

(3)

小秋元段氏「『太平記』巻四古態本文考」（『国語と国文学』第八十五巻十一号、二〇〇八年十月）。なお、氏によれば、玄玖本はB系統を元にした本文である。

(4) 日本国語大辞典によれば、一里はおよそ五四〇～六五四メートルの長さである。したがって、三十里は一六二〇〇～

一九六二〇〇メートルに相当する。

(5) 夫椒と会稽山はもとと離れていることは、岡見正雄氏が「実際の地理としては夫椒と会稽山の間は離れている」指摘した(角川文庫『太平記』)。

(6) 長江下流部は湖口から河口までの八〇〇キロ余りで、南京、鎮江(現在の江蘇省)、南通(現在の江蘇省)を経て上海市域で東シナ海へ流出する。この区間は川幅が広く、水深も大きい。南通付近では川幅は十八キロに達するが、河口部では八〇～九〇キロに広がり、海か川かわからないほどになる。(日本大百科全書による抜粋・河野通博執筆)。なお、長谷川端氏は、新編日本古典文学全集の頭注において、「長江を揚子江の意とするなら誤り」だと指摘し、「会稽山に近い長河は曹娥江である」と注しているが、「曹娥江」は会稽山の東に位置するので、それを渡って呉に行くことはない。増田欣氏は前掲書で『太平記』呉越説話の源泉を『史記』に認定した。

(8) 『史記』卷四十一「越王勾践世家第十一」(中華書局、一九五九年九月、以下同)。ただし、表記は常用漢字に改め、また返り点を付した。なお、同書卷三十一「呉太伯世家第一」

にも同趣旨のことを述べている。

(9) 新釈漢文大系に拠る。以下同。

(10) 新釈漢文大系に拠る。

(11) 『西施演義』(中国近代小説資料彙編シリーズ(台北)廣文局出版、一九八〇年)。成立年代不明。その提要では「茲編依『摠正史』。搜『羅秘笈』。採『取西施瀟雪』国恥之事実。与呉越之所以結仇。勾践之忍辱全身。范蠡文種之奇謀秘計。呉王夫差之昏庸驕傲。子胥伯嚭之忠佞各別。莫不原原本本。分章演述。(以下略)」とあるので、史実に基づき、伝承などを取り入れた歴史演義ものとして、参考程度にしておきたい。

(12) 『史記』卷四十一「越王勾践世家第十一」において、『史記集解』杜預曰「夫椒在『呉郡呉県』、太湖中椒山是也。」と注してある。

(13) 「曠河」について、天正本・義輝本は「長江」とし、西源院本・梵舜本は「大河」とする。『太平記』の呉越説話を引くとされる『曾我物語』(日本古典文学大系)は「こせんといふ大川」となっており、『三国伝記』(中世の文学)は箭灘急ト云大河」となる。なお、西源院本では「三十余里」が「十余里」となっている。

(14) 『呉越春秋』(江蘇古籍出版社、一九八六年一月)。注は元の

時代の徐天祐が施した。

- (15) 『家伝』(『寧楽遺文』竹内理三編、東京堂、一九六二年)。
- (16) 『淮南子』「東南方之美者、有『会稽之竹箭』焉。」(新釈漢文大系による)
- (17) 『扶桑集—校本と索引—』(田坂順子編、權歌書房、一九八五年五月)。
- (18) 彰考館本を底本とする前掲書の校異によって、詩歌の意味から判断して、内閣文庫蔵昌平坂學問所本、松浦史料博物館本の「洛」を取った。
- (19) 『世説新語』の引用はすべて新釈漢文大系による。以下同。
- (20) 王子猷嘗寄人空宅「住、便令種竹。或問、暫住何煩爾。王嘯詠良久、直指竹曰、何可一日無此君」。
- (21) 『蒙求』には「子猷尋戴」の項目で掲げる。
- (22) 嶋田さな絵氏「東晋から劉宋初における会稽の山水と知識人」(『中央大学アジア史研究』第三十四号、二〇一〇年三月)
- (23) 『枕草子』(日本古典文学大系)「故殿の御服のころ」章段。「和漢朗詠集」巻下「交友」。
- (24) 『史記』や『呉越春秋』以外にも、例えば、『蒙求』に「范蠡泛湖」、「西施捧心」などの項目がある。
- (25) 新編日本古典文学全集『将門記陸奥話記保元物語平治物語』・「良正の執念と川村村合戦」。
- (26) 前掲書「平良兼の襲撃」。
- (27) 前掲書「将門貞盛、信濃国千阿川の合戦」。
- (28) 新編日本古典文学全集『将門記陸奥話記保元物語平治物語』・「貞任の猛攻を退斥け、官軍勝利す」では、「昔、勾踐、范蠡の謀を用ゐて、会稽の恥を雪ぐを得たり。」と原典となる故事を全体的にまとめる箇所もある。
- (29) 覚一本『平家物語』は日本古典文学大系に拠る。以下同。
- (30) 『吾妻鏡』(新装本新訂増補国史大系第三十二卷、吉川弘文館、二〇〇〇年三月)。以下同。
- (31) 『鎌倉遺文』(東京大学史料編纂所編CD-ROMによる)にも「会稽の恥」を「会稽」で表す用例が見られる。例えば、一〇一〇番文書、四八〇八番文書など。
- (32) 『吾妻鏡』治承四年(一一八〇年)十月二十一日条「去平治二年正月。於襁褓之内。逢父喪之後。依繼父一条大藏卿長成之扶持。為出家。登山鞍馬。至成人之時。頻催『会稽之思』」。
- (33) 『吾妻鏡』建久四年(一一九三)五月廿九日条「被召出會我五郎於前庭上。将軍出御。(中略)五郎申云。討祐經事。為雪父尸骸之恥。遂露身露憤之志。畢。自祐成九歳、時致七歳之年以降。頻挿『会稽之存念』。片時無忘。而遂果之。」

(34) 『百鍊抄』(新装本新訂増補国史大系第十一卷、吉川弘文館、二〇〇〇年七月)。

(35) 『玉葉』嘉応二年十月廿一日、廿二日、廿四日条や、『愚管抄』巻五によって知る。

(36) 『法然上人絵伝』(大橋俊雄校注、岩波文庫、二〇〇二年四月)。
なお、『法然上人傳の成立史的研究』第二巻、対照編(臨川書店、一九九一年十二月)によれば、当該箇所「会稽の恥」を用いたのは四十八巻本のみである。

(37) 右掲書の解説による。

(38) 『源平盛衰記』巻二「会稽山」(中世の文学、三弥井書店、一九九一年四月。以下同。)なお、巻十七にも「勾踐夫差事」がある。

(39) 内閣文庫蔵慶長古活字本を底本とする右掲書の校異によれば、近衛本は「けいの山」とあり、静嘉堂本・蓬左文庫本は共に「稽山^{ケイザン}」となる。

(40) 「陶朱辞越之暮、眼混五湖之煙」の注釈。『和漢朗詠集古注釈集成』第二巻(大学堂書店、一九九四年一月)。「□」のところは「雨+虫」の字形かとする。

(41) 金刀比羅本『平治物語』に関する引用は日本古典文学大系による。また、古活字本の当該箇所は「つひに呉に向ふ所に、

越王うちまけて会稽山に引こもるといへども、かなひがたきがゆへに、降人と成て(以下略)」と、漠然としており、位置関係の判断が難しい。

(42) 新編日本古典文学全集による。

(43) 「陶朱辞越之暮眼混五湖之煙」の注釈として記されたものである。

(44) 学習院大学図書館蔵本(九条家旧蔵)を底本とした、新日本古典文学大系に拠る。

(45) 『和漢朗詠集古注釈集成』第一巻(大学堂書店、一九九七年六月)による。

(46) 広島大学本『和漢朗詠集仮名注』も「夫差窃聞儲^{フセト}軍、遂呉与越戦^{フセト}会稽山の下」。越軍大敗。」と、似たような解釈をした。

(47) 例えば、『三国志演義』における諸葛孔明と周公謹の関係である。公謹は愚かだから負けたのではなく、諸葛孔明があまりにも強いからだ。